

## 第4回幼・保・小合同研修会

と き 平成28年9月28日(水) 午後3時～午後4時40分  
ところ 郡山市総合福祉センター5階集会室

講演・演習 「個別教育の理解と支援～現場で役立つ計画・実践・記録～パート2」  
講 師 明治安田こころの健康財団 子ども療育相談センター長 新井 利明先生

講師は長年子どもの療育相談に関わってこられたことから、豊富な事例に基づいてそして笑顔で子どもたちへの愛情あふれるお話をしてくださいました。一部を紹介します。

### 個別教育を理解し発達を支援する

1. 子どもの特徴を考慮した発達支援
  - (1) 明確な基準と結果
  - (2) 必要十分な注目
  - (3) 必要十分な賞賛(プラスの評価)



### 講演の概要

個別教育の理解と支援について

- ① 明確な基準と結果 ②必要十分な注目 ③必要十分な賞賛(プラスの評価)  
という点から具体的な例を挙げて話されました。
- 発達障がいの子どもの支援は、それぞれ対応の仕方が違う。障がいのあるお子さん、中でも自閉症スペクトラムのお子さんは、あいまいさがなく「なんとなく」や「周りがやっているから」といって真似をしたり自分から覚えようとしたりしない。そのため、視覚支援(明確な基準)が必要である。
- 注目されたくて行動したことが周りを困らせる行動になってしまう。適切なことをほめるのが有効だが、そのためにはほめるための基準が必要である。  
困った行動を変えていくためには、課題を分析したスモールステップと集中訓練でその日のうちに解決すること、障がいそれぞれの特性に応じた指導が大事である。

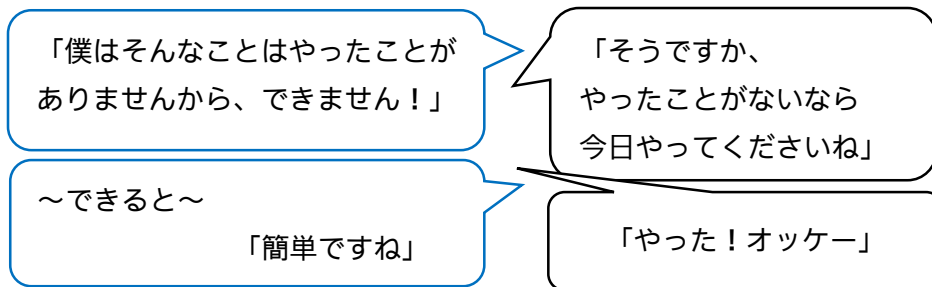
自閉症スペクトラム症・障害  
(ASD)

目標共有が×なので大前提からの説明では納得させにくい

注意欠陥多動性症・障害 (ADHD)

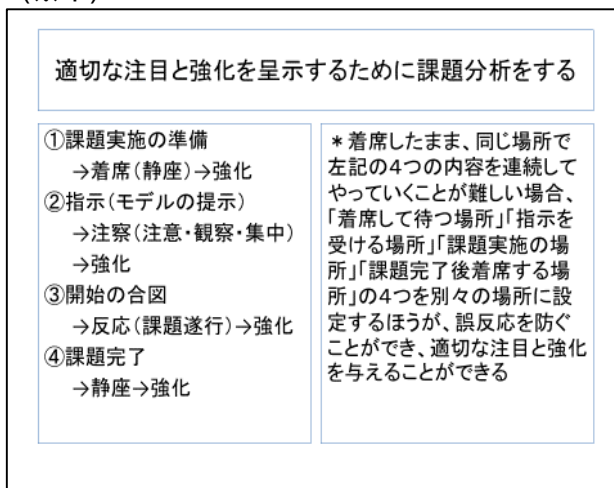
目標共有は○だが、聞き逃しやフライング、手順の省略とショートカットで失敗が多く傷つきやすい、自分ひとりではペース配分が困難

《自閉症スペクトラム症・障がい児と講師の会話の例》

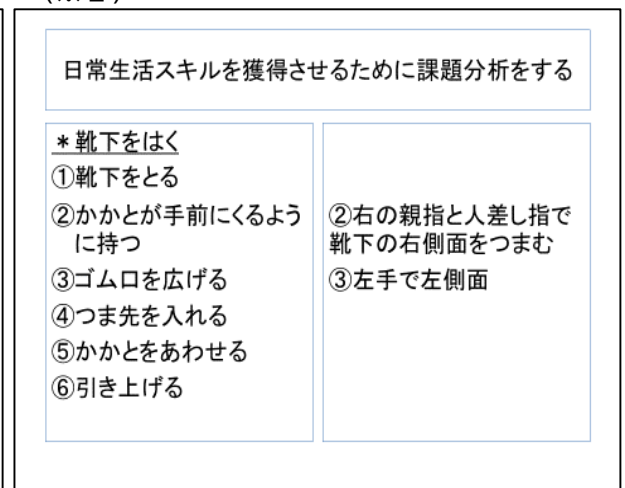


- 明確な獲得目標を持ち、ひとつひとつ課題を分析しやり方を教え何度も行ってその場で覚える集中訓練を行う（※1）（※2）。やりきることで身につくことがたくさんある。「靴下をはく」の例（※2）のように、右手の親指と人差し指で靴下を持つというようにという細かなところまで分析して教え、少しずつだが確実に覚えれば次は絶対できる。しかし、教える側が違う言い方をしただけでまったくできなくなることもある（※3）ので、大人も工夫や協力が必要。

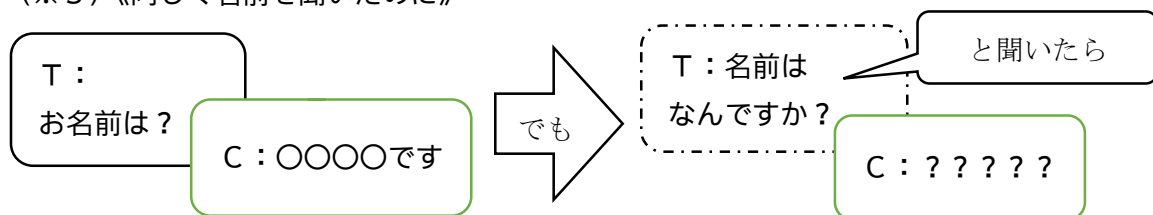
（※1）



（※2）



（※3）《同じく名前を聞いたのに》



- その子のために、方向付けをし、理論付けをしてほめてあげたいと思っている。そのために、よく見てあげて、「これならいいんじゃないか」「これならいけるんじゃないか」と考えて接している。
- 障がいのある子は自分から「もっとやりたい」「もっとがんばりたい」とは言わない。ひとつひとつ問題を解決しながら前向きに動くためには、子どもの将来を見通し、誰かが代弁者になることが必要である。